

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

ベルクソン『創造的進化』の総合的研究-受容史的 背景を踏まえた西洋哲学研究の再構築

著者	安孫子 信
ページ	1-6
発行年	2010-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/7231

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007 ～2009

課題番号：19320006

研究課題名（和文）ベルクソン『創造的進化』の総合的研究—受容史的背景を踏まえた西洋哲学研究の再構築

研究課題名（英文）A global study on Henri Bergson's *Creative Evolution*

研究代表者

安孫子 信 (ABIKO SHIN)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70212537

研究成果の概要（和文）：生の哲学，生政治，生命倫理といった諸分野が今日，全人類的広がり
で考究している生命の行く末をめぐる議論に，ベルクソン哲学がなお不可欠の指針を与えてい
ることを，日本における西洋思想研究としては画期的なことであるが，世界のベルクソン哲学
研究者を動員し，それぞれの研究の伝統をぶつけ合う，経年の，開かれた共同研究を通じて提
示していくことができた。

研究成果の概要（英文）：Such disciplines as Philosophy of Life, Biopolitics, Bioethics are now
all preoccupied, after all, by the question of from where the life comes and where it goes.
Our study concerning Bergson's *Creative Evolution*, through its intendedly international
and intercultural readings and their direct confrontations, demonstrates that the answer
this book gave to the question remains excellently competent in many manners.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
年度			
総 計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学倫理学

キーワード：哲学，思想史，生命，進化，フランス，ベルクソン

1. 研究開始当初の背景

(1)わが国を含む，世界各地でベルクソンの生の哲学再読の機運が見られながら，本家であるフランスの研究が全体を糾合するといったこともなく，それらは散発的な現象に留まっていた。

(2)そもそもわが国の西洋哲学研究は，テーマ

は西洋にとりながら，日本国内で日本人研究者間だけで，日本語で書き論じるという状態が続いていて，それを海外に発信すること，それを海外の研究者に直にぶつけるといったことは多くなおざりにされてきたのである。

(3)生命をめぐる諸問題が，社会政治経済的に

のみならず、何よりも哲学倫理的に全世界地球規模で、差し迫ったこととして問われている現状からして、わが国の哲学研究のこの状況はもはや容認され得ないものに見えていた。

2. 研究の目的

(1) 生命の意味をどう考えるか、生命の独特の価値をどう主張していくのかという、生命をめぐる哲学倫理的な根本問題を、あくまでも現代が置かれている現状、現代が苛まれている諸問題に照らして考察していくことが目指された。

(2) その際、折りしも出版 100 周年を迎え世界各地で熱烈に再読が進んでいたベルクソン『創造的進化』を一つの据え石として中心に置き、この書でのベルクソンによる提案をたたき台とすることが行われた。つまりこの書の真価を改めて問うこともそこでは目指された。

(3) さらにその際に、中心に置かれたこの書に、文化社会歴史的な文脈を異にするさまざまな読解・解釈を激しくぶつけていくこともなされていった。つまりそれは、日本における西洋哲学研究の閉鎖的な現状を打破して、それを世界とのより積極的な対話に開いていくことを目指すものでもあった。

3. 研究の方法

(1) 3 ヶ年のそれぞれ後半に年に一回、3 日間にわたる大きな国際的な研究集会を置き、そこへの準備が各年の前半に来るようにし、また後半の残りには各研究集会の成果のとりまとめが行われるようにした。

(2) その際、各研究集会の方式自体が、本研究の方法の真髄を語るものになっていたと思う。まず国際的な共同研究の年度ごとの相手として、一年目には主にヨーロッパとアメリカのベルクソン研究者が、二年目には主に東アジアのベルクソン研究者が、三年目には、ヨーロッパとアメリカ、そして東アジアの研究者が再度の者も含んで、多数日本に招請された。

(3) 研究集会では絞られた同一テーマについて、日本からの発表者と外国からの発表者とが対になって、あるいは 3 名一組になって、議論をともなった報告を行った。その際の共通言語は主にフランス語で、少なくとも発表者間ではすべてが通訳を介さずに直に行われるようにした。

(4) 他方で発表テキストは前もって翻訳が用意され、発表者間の討議には、一般聴講者用

に、通訳がなされるようにし、それが日本で開かれた形で行われることの意味が残るようにした。そして発表原稿は発表言語で（つまりは大部分が仏語、ごく一部が英語で）、ヨーロッパでアクトの形で出版されるようにした。

4. 研究成果

(1) 共同研究の参加者として、国内外を問わず、現在望みうるベストのベルクソン研究者たちを得ることができたことがまず大きい。たとえば、フランスからはフレデリック・ウォルムスやジャン＝ルイ・ヴィエイヤール＝バロン、ピエール・モンテペロ、イギリスからはジョン・マラーキー、アメリカからはピート・ギュンターやスザンヌ・ガーラック、韓国からはロイ・チェやスー＝ユン・ファン、など。

(2) 毎回の研究集会では実際に白熱した議論が戦わされた。そして、われわれ日本人の研究発表や発言がそのような白熱を生み出す主たる要因であった。これは狭いが、しかし本質的な意味で、今研究の最大の成果であったと言い得よう。①たとえば、3 年目再度の招請をかけた海外研究者が再度の参加をことごとく快諾してくれた。②またそのような海外からの参加研究者の積極的な橋渡しがあつて、研究集会 3 回のアクトがドイツの出版社 OLMS 社から出版されることが決定した。③さらにこの機会に日本人の西洋哲学研究の質と独自性が確認され、それを受けて、やはり今回研究集会に参加していた海外研究者数名がヨーロッパで関わっていたマスター・エラスムス・ムンドゥス・プログラムの一つ「ユーロフィロソフィ」に、法政大学が正式パートナーとして選ばれ、法政大学での同プログラムの実際の展開に、本研究に参加の日本人研究者も複数関わることになった。

(3) ベルクソン『創造的進化』の真価、またそれのこのような徹底的で刺激的な再読で明らかになった生命の意味・価値については、このようなレジュメの形では伝達がむずかしく正確には、近刊のアクトで、直接確認していただく他はない。①それでも『創造的進化』の生命が一元論に置かれているか、二元論の一として置かれているかについての白熱した、決して決着がつかないやりとりは、この書を内部で貫くダイナミズムの真の姿を提示するものであった。②また後続のドゥールズ哲学との連続と断絶をめぐる議論も、やはり決して決着のつかない、やはり熱したものであつて、これはベルクソン哲学が全体として有する外に発散し、外に産出する力の真の姿をまさに提示するものであった。③さらに科学（物理学、生物学）との対

話においてもベルクソン哲学の科学論が一方ではもう決定的に乗り越えられたかに見えながら、しかし科学のさらなる展開（量子力学、遺伝子工学）が逆にベルクソンによりやく追いついているかのような観を呈していることが示されて、ベルクソン哲学の現代性がどこにあるのかが提示されていたのである。

(4)異なる文化社会歴史的な脈を有し、異なる伝統を有する大きく西洋・東アジア・日本のベルクソン読解が直にぶつけられたことで、相互の哲学研究、相互の文化への理解が大きく進んだこともやはり否定できない成果である。ただそこでの相互理解は、何より相互に異なっていることの理解であって、その違いは解消されていくべきものではなく、むしろさらに研ぎ澄まされていくべきものであるとも確認されたのである。その中で一定の評価を受けることになった、日本における西洋哲学研究の今後の進むべき方向も、よい意味で、ますます自分に忠実にならなければならない、ということになる。ただそれはますます他に開かれた場所においてそうになっていく、ということなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計66件)

- ① 藤田尚志、「場所の記憶、記憶の場所—ベルクソン『物質と記憶』における図式論の問題」『九州産業大学国際文化学部紀要』第45号、2010年3月、181-193頁。査読無。
- ② 藤田尚志、「デジャヴをめぐる：偽なるものの力と記憶の無為—ドゥルーズか、ベルクソンか I I I」『記憶と実存—フランス近現代文学におけるネオ・ジャクソニズム的傾向—』(科学研究費補助金中間報告書)、2010年3月、55-81頁。査読無。
- ③ 藤田尚志、「訳者解説 I I —フランス現代思想におけるゴーシェの位置」マルセル・ゴーシェ、『民主主義と宗教』、トランスビュー、2010年2月、209-227頁。査読無。
- ④ 安孫子信、「言葉と物—ベルクソンにおける」、『思想』No.1028、2009年12月、岩波書店、p3-p10
- ⑤ 檜垣立哉、「記憶の実在—ベルクソンとベンヤミン—」『思想』(第12号1028号)、2009年12月、岩波書店、pp.60-77
- ⑥ 藤田尚志、「ドゥルーズか、ベルクソンか—何を生氣論として認めるか」『思想』(岩波書店)第1028号「ベルクソン生誕150年」、2009年12月、210-223頁。査読無。
- ⑦ 藤田尚志、「ベルクソン研究の現在—サーヴェイ：フランス、英米、日本の現状」『思想』(岩波書店)第1028号「ベルクソン生誕150年」、2009年12月、118-139頁。査読無。
- ⑧ 檜垣立哉、「ヴィータ・テクニカ哲学への序章 連載ヴィータ・テクニカ(1)」『現代思想』(10月号 第37巻 第13号)、青土社、pp.8-17
- ⑨ 安孫子信、「L' introduction de la philosophie occidentale au Japon et le problème du corps humain - le corps humain selon Amane Nishi -」、『国際日本学』第7号、2009年10月、法政大学国際日本学研究センター、p3-p18
- ⑩ 藤田尚志、「踏切板と石板—ベルクソンとレヴィナスにおける物質性の概念」『九州産業大学国際文化学部紀要』第43号、2009年9月、113-133頁。査読無。
- ⑪ 「ベルクソンの暗室—『創造的進化』第四章と映画」、合田正人、『文芸研究』(明治大学文学部紀要)、査読有、108号、37-52頁、2009年3月
- ⑫ 藤田尚志、「言葉の暴力 I I : アナーキーとアナロジー—ベルクソンとソレルにおける言語の経済」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会)第94号、2009年3月、119-131頁。査読有。
http://ci.nii.ac.jp/els/110007160454.pdf?id=ART0009113354&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274620688&cp=
- ⑬ 杉山直樹、「フッサールとベルクソン—二つの「幾何学の起源」」『哲学雑誌』査読有(依頼論文) 第796号 2009年 28頁-44頁
- ⑭ 「構造のパルス—メルロ＝ポンティの思想を通徹するもの」、合田正人、『思想』岩波書店、査読有、1014号、66-84頁、2008年11月
- ⑮ 藤田尚志、「Le tremplin et la table. La matérialité chez Bergson et Lévinas」*Annales bergsoniennes*, Frédéric Worms (éd.), tome IV, Paris : PUF, 2008, pp. 269-283. 査読有。
- ⑯ 藤田尚志、「言葉の暴力—ベルクソン哲学における比喩(トロープ)の問題—」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会)第92号、2008年3月、182-197頁。査読有。
<http://ci.nii.ac.jp/els/110006684247.pdf?id=ART0008710511&type=pdf&lang=>

- [jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274620881&cp=](#)
- ①⑦ 金森修、『『創造的進化』と〈生命の形而上学〉』（単著 依頼論文）、『哲学と現代』第23号、2007年12月31日、pp. 70-87.
 - ①⑧ 金森修、“Bios and his Self-armor”（単著 査読付き）、*Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, No. 2, July 2007, pp. 26-43.
 - ①⑨ 藤田尚志、“Bergson’s Hand: Toward a History of (Non)-Organic Vitalism” *SubStance* (University of Wisconsin Press) Issue 114 “Henri Bergson’s Creative Evolution 100 Years Later”, nov. 2007, vol. 36, no. 3, pp. 115-130. 査読有。
 - ②⑩ 藤田尚志、「唯心論（スピリチュアリズム）と心霊論（スピリティズム）——ベルクソン哲学における催眠・テレパシー・心霊研究——」
『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）第91号、2007年9月、168-182頁。査読有。
http://ci.nii.ac.jp/els/110006402760.pdf?id=ART0008401998&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274620978&cp=
 - 21 藤田尚志、「《大いなる生の息吹…》——ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における呼びかけ・情動・二重狂乱（中）火の領分：情動と共同体』『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）、2007年9月、第35号、167-190頁。査読有。
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/24429/1/ff03510.pdf>
 - 22 藤田尚志、「ベルクソンと目的論の問題——『創造的進化』百周年を迎えて——」
『フランス哲学・思想研究』（日仏哲学会）、2007年8月、第12号、121-131頁。査読有。
 - 23 金森修、「装甲するビオス」（単著 依頼論文）、『身体をめぐるレッスン』第3巻、岩波書店、2007年1月30日、pp. 3-26.
 - 24 杉山直樹、「精神の場所——エピステモロジーとスピリチュアリズムとの間で」
『フランス哲学・思想研究』 査読有（依頼論文） 12巻 2007年 39頁—48頁
 - 25 藤田尚志、“Cassirer, lecteur de Bergson”
Annales bergsoniennes, Frédéric Worms (éd.), tome III, Paris : PUF, 2007, pp. 53-70, suivi de la traduction d’un article par Ernst Cassirer sur “L’éthique et la philosophie de la religion de Bergson”, pp. 71-97. 査読有。
- 〔学会発表〕（計57件）
- ① 藤田尚志、《Déjà-vu : la puissance du faux et le désœuvrement de la mémoire. Deleuze ou Bergson III》, Colloque international 《La pensée et le mouvant - Aristote, Bergson, Merleau-Ponty, Deleuze》, 2010年3月27日、九州日仏学館（福岡）。
 - ② 藤田尚志、《Imagination et Invention chez Bergson et Simondon》, Colloque international 《Le système métastable et l’individuation - Autour de la philosophie de Gilbert Simondon》, 2010年3月24日、明治大学（駿河台キャンパス）。
 - ③ 藤田尚志、「デジャヴをめぐる：偽なるものの力と記憶の無為——ドゥルーズか、ベルクソンか III」、ネオ・ジャクソニズム研究会連続シンポジウム「記憶と実存——フランス哲学と精神医学、そして文学」第1回：ベルクソンとジャネ、2009年11月21日、明治大学（駿河台キャンパス）。
 - ④ 金森修、「病と死の傍らの賢治」日台国際研究会議『東アジアの死生学へ』、2009年10月30日、台湾国立政治大学
 - ⑤ 檜垣立哉、L’existence de la mémoire-Bergson et Benjamin、ベルクソン『創造的進化』刊行百年記念シンポジウム（明治大学）、2009年10月25日
 - ⑥ 藤田尚志、《Désir et joie : deux philosophies politiques de la vie. Deleuze ou Bergson II》, Colloque international “Tout ouvert. L’Evolution créatrice en tous sens”, 2009年10月25日、明治大学（駿河台キャンパス）。
 - ⑦ 安孫子信、“Bergson cartésianisé et Bergson pascalisé”（2009年10月24日、国際シンポジウム「生の哲学の行方」、法政大学）
 - ⑧ 「Spinoza La metamorphose. Le cas Sartre/Bergson」（講演仏語）、ベルクソン『創造的進化』刊行百年記念シンポジウム（法政大学）、MasatoGODA、2009年10月23日
 - ⑨ 金森修、「生権力と死の思想」、「安楽死の思想史」『学術俯瞰講義』、2009年6月29日、7月6日、東京大学教養学部
 - ⑩ 金森修、「死の扉と、生の出口」シンポ

- ジウム『死生学の可能性』、東京大学文学部、2009年6月14日
- ⑪ 藤田尚志、「場所の記憶、記憶の場所—『物質と記憶』における図式論の問題」、第68回日本哲学会大会、2009年5月17日、慶応大学（三田キャンパス）。
 - ⑫ 杉山直樹、「『笑い』という書物はいったい何をしているのか」 第25回ベルクソン哲学研究会 2009年3月22日 京都大学
 - ⑬ 杉山直樹、「超越論的主観性のゆくえ——ベル・エポック期のフランス哲学からの一考察」 第87回 PHILETH セミナー 2009年3月7日 北海道大学
 - ⑭ 藤田尚志、「《L'Université manque à sa place dans la philosophie française; ou de La Politesse de Bergson》, le 3e forum "Philosophie et Éducation": "Le droit à la philosophie. La déconstruction des institutions de recherche et d'enseignement à l'époque de la globalisation", 2008年11月24日、エコール・ノルマル・シュペリウル（フランス・パリ）。
 - ⑮ 檜垣立哉、「Le vitalisme de Bergson et son contexte、ベルクソン『創造的進化』刊行百年記念シンポジウム（京都大学）、2008年10月20日
 - ⑯ 安孫子信、「Bergson et le problème de 《deux ordres》 - une lecture du chapitre III de *L'évolution créatrice*」(2008年10月11日、国際シンポジウム「東アジアにおけるベルクソン」, 明治大学)
 - ⑰ 檜垣立哉、「Le tournant dans l'interprétation deleuzienne de Bergson、ベルクソン『創造的進化』刊行百年記念シンポジウム（法政大学）、2008年10月10日
 - ⑱ 藤田尚志、「《Deleuze ou Bergson : à quoi reconnaît-on le vitalisme ? 》, Colloque international "Bergson extrême-orientable", 2008年10月10日、法政大学（市ヶ谷キャンパス）。
 - ⑲ 「Kabbale inavouable des néants」(講演仏語)、上記ベルクソンシンポジウム（法政大学）、Masato GODA、2008年10月9日
 - ⑳ 杉山直樹、「Quelques réflexions pour la relecture du bergsonisme — à partir du boom de Bergson au Japon dans l'ère Taisho " ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム「アジアにおけるベルクソン」 2008年10月9日 法政大学
 - 21 金森修、「Autour de la question de Bios et de Zoe」
 - Autour du corps humain, Bioethique comparee France - Japon, Centre Georges Canguilhem, 2008年9月4日～5日
 - 22 藤田尚志、「Khorologie de la mémoire. Une lecture de Matière et Mémoire », Colóquio "As ilusões da razão na velha metafísica. Crítica do negativo e pensamento em duração na filosofia de Bergson", 2008年6月25日、サン・カルロス連邦大学（ブラジル、サン・カルロス）。
 - 23 藤田尚志、「言葉の暴力 II : アナーキーとアナロジー——ベルクソンとソレルにおける言語の経済」、日本フランス語フランス文学会 2008 年度春季大会、2008 年 5 月 25 日、青山学院大学。
 - 24 金森修、「身体哲学と倫理」サイエンスアゴラ 2007『サイボーグに未来はあるか?』、東京国際交流館メディアホール、2007年11月25日
 - 25 藤田尚志、「Le tremplin et la table: matière et mémoire chez Bergson et Lévinas », Congrès international de clôture de l'Année Bergson "*L'Évolution créatrice* de Bergson cent ans après (1907-2007) : Épistémologie et Métaphysique" (2e journée: Métaphysique, Atelier 1 présidé par F. Worms), 2007 年 11 月 24 日、エコール・ノルマル・シュペリウル（フランス・パリ）。
 - 26 「Poétique des ruines」(発表仏語)、合田正人、上記ベルクソンシンポジウム、京都大学文学部、2007 年 10 月 20 日
 - 27 安孫子信、「Bergson et l'histoire des sciences — une lecture sommaire de l'Évolution créatrice—」(2007 年 10 月 17 日、ベルクソン『創造的進化』刊行 100 周年記念国際シンポジウム、法政大学)
 - 28 金森修、「Fixation de l'instantané et de la forme」ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム『生の哲学の今』法政大学、2007 年 10 月 17 日
 - 29 藤田尚志、「De "l'industrie de l'être vivant" : l'organologie bergsonienne », Colloque international "Disséminations de L'Évolution créatrice: histoire(s) de la réception", 2007 年 10 月 17 日、学習院大学。
 - 30 杉山直樹、「Horizon de l'idéal, frange de la vie : De l'origine bergsonienne de la géométrie " ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム

- 「生の哲学の今」 2007年10月16日 学習院大学
- 31 藤田尚志、「言葉の暴力—ベルクソン哲学における比喩（トロープ）の問題」、日本フランス語フランス文学会 2007 年度春季大会、2007 年 5 月 20 日、明治大学（駿河台キャンパス）。
- 32 金森修、「『創造的進化』と生命の形而上学」『名古屋哲学研究会』、名古屋市立大学、2007 年 5 月 12 日
- 33 安孫子信、「Bergson et Comte -une lecture du quatrième chapitre de l' Evolution créatrice- (2007 年 4 月 21 日、ベルクソン『創造的進化』日欧ワークショップ、フランス、トゥールーズ第 2 大学)
- 34 藤田尚志、「Vitalisme et Finalisme. Bergson et le problème de la téléologie », Ateliers euro-japonais sur l' Evolution créatrice, 2007 年 4 月 20 日、トゥールーズ大学（フランス・トゥールーズ）。
- 35 金森修、「Evolution Creatrice et Metaphysique de la vie”Ateliers euro-japonais sur « L' evolution creatrice » de Bergson, Université de Toulouse II Le Mirail. Maison de la Recherche. Salle des Actes, le 19 avril 2007. トゥールーズ、2007 年 4 月 19 日
- 36 杉山直樹、「La biologie l' inspirait” - Notes sur l' enjeu épistémologique et philosophique de la biologie chez Bergson ” Ateliers Euro-japonais sur l' Evolution Créatrice de Bergson 2007 年 4 月 19 日 トゥールーズ第二大学

〔図書〕（計 21 件）

- ① 金森修、『〈生政治〉の哲学』単著 ミネルヴァ書房、2010 年 3 月 30 日、pp. 1-339+ i-v, 1-20
- ② 合田正人、『医療環境を変える』（多賀茂、三脇康生編、共著）、京都大学学術出版会、査読有、213-236 頁（総 426 頁）、2009 年 8 月
- ③ 檜垣立哉、『ドゥルーズ入門』ちくま新書 221 頁、2009 年
- ④ 安孫子信、『Japanese Studies: Seen from Europe, Seen from Japan (co-auth., Dec. 2008, Hosei University Center for International Japanese Studies, p177-p183)
- ⑤ 金森修、『エピステモロジーの現在』編著、慶應義塾大学出版会、2008 年 1 月 10 日、pp. 1-500.

- ⑥ 檜垣立哉、『賭博／偶然の哲学』河出書房新社 178 頁、2008 年
- ⑦ 小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編（2008）『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社 檜垣部分は p. 1-p. 6、p. 360-p. 380
- ⑧ 杉山直樹、中央公論新社 『哲学の歴史別巻』（共著） 2008 年 163 頁—172 頁
- ⑨ 安孫子信、『哲学の歴史 8、社会の哲学』（共著、2007 年 11 月、中央公論新社、p111—p166)
- ⑩ 杉山直樹、理想社 石井敏夫『ベルクソン化の極北』著作解題「石井敏夫氏の作品について」 289 頁—309 頁

〔その他〕

ホームページ等

http://www.cms.k.hosei.ac.jp/project-Bergson-Japan/f/f_index.html

<http://hitec.i.hosei.ac.jp/~ERASMUS/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安孫子 信 (ABIKO SHIN)
法政大学文学部・教授
研究者番号：70212537

(2) 研究分担者（平成 19 年度）

金森 修 (KANAMORI OSAMU)
東京大学教育学研究科・教授
研究者番号：90192541
（H19→H20：連携研究者）
合田 正人 (GODA MASATO)
明治大学文学部・教授
研究者番号：60170445
（H19→H20：連携研究者）
望月 太郎 (MOTIDUKI TARO)
大阪大学学内共同利用施設等・教授
研究者番号：50239571
（H19→H20：連携研究者）
檜垣 立哉 (HIGAKI TATSUYA)
大阪大学人間科学研究科・准教授
研究者番号：70242071
（H19→H20：連携研究者）
杉山 直樹 (SUGIYAMA NAOKI)
学習院大学文学部・教授
研究者番号：50274189
（H19→H20：連携研究者）

(3) 連携研究者

藤田 尚志 (FUJITA HISASHI)
九州産業大学国際文化学部・講師
研究者番号：80552207